

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo Giapponese

(財)日本イタリア京都会館は、4月1日より公益財団法人 日本イタリア会館 になりました。

イタリアそろばんの旅⑨

夜の駅に

木下 和真

イタリアの各地で講演を行うと、特別なことがない限り、現地の方が駅まで送ってくださる。ミラノで講演を終えた後も、補習授業校の先生が中央駅まで一緒に来てくださった。一人でも大丈夫と思っていたのだが、夜のミラノ、ヴェローナ行の列車に乗るところまで見届けないと心配だということだったので、ありがたく好意に甘えることにした。ミラノは初めてなので、夜のドウオーモとスフォルツェスコ城を外から眺め、ミラノ中央駅に到着したのは8時15分過ぎだった。時刻表を確認すると次の列車は8時25分。これに乗るとなると大急ぎで切符を購入し乗り込まねばならない。夕食もまだだ。ヴェローナ行の列車はまだある。8時25分以降は9時の特急と9時25分の普通がある。9時半の列車が最終でないことを確認したうえ、夕食を取り、9時25分発の普通で帰ることにした。

駅近くの店で夕食を取り、補習校の先生に列車に乗るところまで付き添ってもらい、別れを告げた。

一日の仕事をやり終え、座席に座っていると列車は何の前触れもなく走り出した。発車のベルなどない。大都市間を結ぶこの路線はヨーロッパの人々が満員だ。窓の外は暗く自分の姿が映る。ほっと一息つき、くつろごうとしたその時だった。私はあることに気付いた。

「しまった。ガッチャンを忘れた！」

ガッチャンとは切符を刻印機に通し、その日の日付を刻印することだ。ヨーロッパの駅は日本と

は違い改札口がない。切符を持っていなくてもホームに入れる。また購入した切符は一定期間の有効期限を持つため、乗車する際は必ず刻印機を通し、ガッチャンとその日の刻印を刻まねばならないのだ。

実は私、イタリアで初めて列車に乗った時も刻印をしていなかった。アルプスの麓のメラーノという町へ、週末を利用して行ったのだが、その時は刻印機が存在をまったく知らないまま列車に乗り込んだ。幸運なことに、車掌から「乗り換えの駅で刻印を押しなさい」と言われただけですんだのだが、あとで聞くと通常、旅行者でも容赦なく罰金を取られるという。その額50ユーロ。かなりの出費だ。

ミラノからヴェローナに向かう列車は、この先ヴェネチアまで続く。大都市を結ぶこの路線で車掌が許してくれるはずもない。

「どうにかしてガッチャンをしなければ！」

そう思った瞬間から、ゆっくりと席に座っていたらなくなった。

「なんとかして罰金だけは避けなければ！」

心は騒ぐ。そういえば、ヴェローナの駅にもホームに刻印機があった。大きい駅ならさっと降りてホームでガッチャンできるかもしれない。とりあえず次の駅で探してみよう。私は荷物を握りしめ、いつでも飛び出せる体制を整えた。

ミラノから25分、列車はトレヴィリアに到着した。決して大きい駅とは言えないがベルガモへの乗り

換え駅だったので馴染みがある。

私はドアが開くと同時に列車から駆け出した。右手に切符、左手に大そろばん、背中にはリュックを背負っての猛ダッシュだ。

20メートルほど走ってみたが、ガッチャンはない。列車が行ってしまっただけで元も子もない。とりあえず列車のドアに戻る。ドアを引くが開かない。なぜ？ もう一度思いっきり力を込めて取っ手を横に動かす。なんてことだ。微動だにしない。こうなれば別のドアに向かうしかない。再度ダッシュで次のドアへ向かう。このドアは開いた。

乗り込もうか？

けれど、ガッチャンはできていない。検札が来たらどうする。50ユーロを払うか？ もしかしたら、ホーム中央にガッチャンがあるかもしれない。まだ、列車は動きそうにない。もう少し探そう。

そしてもう20メートル走った。やはりガッチャンはない。だめだ。列車に戻らねば。そう思い、一番近いドアの取っ手に手をやり、力を入れた。

なぜだ。このドアも動かない。ぴくともしない。向こうのドアなら。そう思った瞬間、列車はなんの前触れもなくすうっと動き出した。呆然として開かないドアの前にたたずむ私を無視し、無情にも列車は走り去っていった。

「馬鹿かお前は！ なんて最初に乗らないんだ」

横で、イタリア人のおじさんがあきれ顔で私に言った。こんな時に限ってイタリア語がすんなりと頭の中に入ってくるのはどういうことだろう。

「だって、ガッチャンが」

と言いたいのだが、こちらのイタリア語は出てこない。切符をおじさんに向けて振ってみるが何も伝わらない。

嘆いても仕方ない。次の列車に乗れば済むだけの話だ。少々値は張るが特急に乗れば少しは早く着くだろう。気持ちを切り替え刻印機を探した。結局ここトレヴィリアのホームに刻印機はなく、階段を下り、駅の入り口まで行かなければならなかった。

ガッチャン。

夜十時、人っ子一人いない駅に刻印機の音が響いた。

これだけのために…



【夜の町】

とにもかくにも次の列車を探さねばならない。時刻表でヴェローナ行きの列車を探す。三十分一本はあると高を括っていたが、当ては外れた。夜の十時を過ぎると列車の本数はぐっと減る。おまけにトレヴィリアには特急は止まらないことが判明。次の列車は一時間後だった。

最初から特急にしなかったのがそもそもの失敗だった。特急は全席指定なのでガッチャンの必要はない。各地への交通費は自腹だからといっても特急料金くらい払うべきだった。学生の貧乏旅行ならまだしも、助成金までもらっているのに……

十月下旬の北イタリアは秋から冬への移り変わりの時期だ。数日前の大雨以来めっきり寒くなった。夜になるとかなり冷えてくる。この中で一時間とは、今回に限って日本の小説も持ってこなかったのは大きなミスだ。

人っ子一人いない。一人いたとして話しかけることもできない。何もすることがない。

ヴェローナに行かないまでも、乗れる列車はないだろうか。列車に乗れば寒さがしのげる。時刻表をにらむと、プレシア行の列車が見つかった。途中の駅で通過待ち、ヴェローナ行に追い抜かれるという悲劇だけはごめん。念入りに乗継を確認し、これに乗ることにした。15分ほど待つと列車が来た。

トレヴィリアから約1時間プレシアに到着。この駅止まりの為、わずかばかりの乗客は皆この駅で降りる。そこからまた20分待つ。空気はさらに冷え込んでいる。その中の20分は想像以上に長い。駅を見回しても、時間をつぶせるようなものはない。静まり返った空間だけが広がる。次の列車は最終列車だ。もし、ホームを間違えて待っていたらこれまた悲劇だ。止まるホームが急に変わるこ

ともイタリアでは珍しくない。どんなことがあっても乗り過ごすわけにはいかない。最後の気力を振り絞る。

ついにヴェローナ行の最終列車が来た。ここブレシアでこの列車に乗り込んだのはたった二人だけ。そこからまた約一時間かけて、深夜0時30分、やっとのことでヴェローナの駅にたどり着いた。この時間になると駅からの交通手段もない。そこから約20分、荷物と体を引きずりレジデンスに向かう。この時間になると街は静まり返っている。深夜1時、やっとのことでレジデンスに到着した。

明日が日曜日なのがせめてもの救いだ。私はベッドに倒れこむ。そして気付いた。ガッちゃんをして安心しきっていたが、トレヴィリアからブレシアの間も、ブレシアからヴェローナの間も車掌が検札に来ることはなかった。

次の日コラードさんにこのことを話すと、刻印機を通し忘れたときの対処法を教えてくださいました。忘れたときはまず自ら車掌を探すそうだ。そして、刻印機を通し忘れたことを伝える。すると、車掌がその日の日付を刻印してくれるそうだ。もし、車掌が見つからなければ、切符にボールペンで自ら日付を書き込むそうだ。その日しか使わない旨をはっきりさせればよいとのことだった。



【とある駅の風景】
(当館語学受講生)

イタリアンレストラン紹介 ～大阪・福島～

Pizzeria Morita

ピッツェリア モリタ

イタリアーニの様に1人1枚のPizzaを
食べてもらえたら、のPizzeriaです

特典(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)
Pizzaの生地を使った小さなデザートをサービス

住所: 大阪市福島区福島5-6-33 井上ビル1階
電話: 06-6450-0630

営業時間: 11時30分～14時<ラストオーダー>

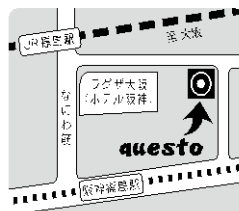
17時～21時30分<ラストオーダー>

(定休日: 日曜日、第1・第3月曜日)

☆イタリアピザコンクールにて、日本人で初めて
総合優勝された森田武司さんのお店です



Pizzeria Morita



森田 武司

大阪市福島区福島5-6-33
井上ビル1F

イタリア発月刊日本語新聞

COMeVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax: (06) 4743. 212
E-mail: comeva@nipponclub.it
URL: www.nipponclub.it

RiITALIA -イタリア再発見-

第9回『イタリア語の詩を読むⅡ』

国司 航佑

先日、道を歩いているとふと一節の詩句が筆者の頭をよぎった。

“Forse perché della fatal quiete tu sei l'immagine”

これは、19世紀初頭に活躍したイタリアの詩人、ウーゴ・フォスコロのソネット *Alla sera* (夜へ) の冒頭である。この詩句がふいに思い出されたのは、一体なぜだろうか。実をいうと、筆者はここ数年フォスコロの作品を全く読んでいない。集中的に読んだのは、だいぶ昔のことである。当時は、韻文の規則すらあやふやな程度のイタリア語力しか所有していなかったから、フォスコロの詩のよさが十分に把握できていたとは到底思えない。しかし、分からないなりに、何行かの詩句を頑張って暗記したのだ。それが今になってどういう訳か思い出されたのであろう。

ところで、当時暗記したはずのフォスコロの他の詩についてはどうだろうか。神経を集中させて思い出そうと試みても、何も出てこない。ダンテやレオパルディなどの愛着のある詩人の詩行は記憶の中にある程度まで定着しているため暗唱しようと思えばできないことはないのだが、フォスコロの詩は、いつぞやの努力もむなしくどうやら忘却のかなたへと押し流されてしまったようだ。それでも、上に掲げた *Alla sera* (の冒頭) だけは、なぜだか記憶の片隅にこびりついて生き延びていた、というのだからなんとも不思議である。

ああでもないこうでもないと考えた末、思い当たったのは最近(といっても、2年前だったか6ヶ月前だったか思い出せない)見た YouTube の動画であった。それはつまり、筆者の生まれた直後ぐらいに流行したアニメ『聖闘士聖矢』の、イタリア語版のワンシーンである。そこではなんと、主要登場人物の一人と思われる青年が、先述の *Alla sera* の一節をつぶやいているのだ。ギリシア語に由来する星々の名がそのまま登場人物に付されているようなこのアニメの中では、フォスコロの詩句がしっくりくる気がしないこともない。だが、遠い

東洋の島国からやってきたアニメの吹き替えを作るにあたって、自国の有名な詩の一節を登場人物の口に上らせようとするこのイタリアの配給会社の大胆な試みには、大きな驚きを禁じえない。



【ウーゴ・フォスコロ】

今となつては、この詩に初めて出会ったときに受けた印象がどのようなものであったかはっきり覚えていない。だが、例の一節を再びつぶやいたとき、この部分に対する自らの愛着がはっきりと確認された。まず、“Forse perché” (それは恐らく～だから) という最初の二語が筆者を引き込む。何の前触れもなしに、なんらかの事象の理由の説明が始まる。しかも、その理由は不確かなものであることが伝えられている。だから、まず理由が説明されて、その後に主題が述べられるのだな、という検討がつく。そしてまた、その理由と主題の関係が不安定なものであるということも分かる。こうして、このたった二つの単語が与えられた時点で、筆者の想像力はこの上なく刺激されるのである。

また、次いで登場する“della fatal quiete”という一連も味わい深い。“fatal quiete”は、「宿命なる静寂」とでも訳すべき表現であるが、これは婉曲的に「死」を指し示している。また、その前に置かれている“della”は、前置詞“di”と冠詞“la”の組み合わせであり、イタリア語を学習されている方

には分かるだろうが、本来その直前におかれた名詞(もしくは、di と組み合わせる特定の動詞)を修飾すべき語である。しかしこの場合、その前には“perché”という接続詞があるのみで、かかるべき語が見出されない。そう、ここでは倒置がなされており、“della fatal quiete”は次にくる“l'immagine”にかかっているのである(“l'immagine della fatal quiete”というまとまりで「宿命なる静寂のイメージ」というような意味になる)。

この詩を最初の一語から順序正しく読んでいくとき、筆者は、“Forse perché della fatal quiete”というところまで到達した時点で次の展開を予想することを強制されているような気になる。上述のとおり、“della fatal quiete”はかかるべき単語を必要とするので、まずそれが何であるかについて無意識下での推測が始まる。直後にくるのは“tu sei”であるから、まだ答えは明かされない。そして、その一拍を挟んだのち、ついに“immagine”(イメージ)という正解にたどり着くのである。また、そうこうしているうちに、perché に導かれる従属節が終わってしまっている。「おそらくあなたは宿命なる静寂のイメージであるから」…なんなのか — 主節で述べられるだろう主題を予想することがここで要求されるのである。Alla sera の冒頭は、このようにして筆者の想像力を強く刺激するものであり、だからこそ、記憶の奥底にこびりついて離れなかったのだろう。ちなみに、“immagine”という単語を耳にしたことがないという読者もおられるかもしれないが、これは現代イタリア語の“immagine”に相当する古風な言い回しである。筆者はおそらく、フォスコロの詩を通じてこの表現を覚えた。こうした些細な出来事もまた、記憶の定着に一役買ったのだろうと思われる。

いやひょっとすると、“forse”という副詞が作り出すあいまいな雰囲気、ことさら強い詩情を見出してしまうのかもしれない。筆者は中学生の頃、英国のロックバンド、オアシスの曲をよく聴いた。当時は英語を学習し始めたばかりだったから、大部分の歌詞の意味を理解していなかったことと思う。しかし、彼らの曲の一つで、当時の筆者に分かるほどの平明な英語を使用しつつも、妙に心に響いてくるものがあった。Live forever がそれである。そこでは、“maybe”という単語が次のように連呼される。“Maybe I just want to fly/ I want to live I don't want to die/ Maybe I just want to breathe, Maybe I just don't believe/ Maybe you're the same

as me”。何の変哲もないいくつかの文が、文頭に“maybe”を据えるだけで非常に意味深な表現へと変貌を遂げているではないか！…と少なくとも筆者には思えた。ついでながらに言ってしまうと、オアシスの最も有名な曲Wonderwallには次のような歌詞がある。“Because maybe you're gonna be the one that saves me”。内容は全く違っても、構文は例のAlla seraになんとなく似ているのである。フォスコロの詩に対して筆者が抱く不可思議な愛着には、オアシスの曲がなんらかの影響を与えているのかもしれない。

フォスコロの詩に限らず、筆者は好きな詩と対峙するとき、ついつい自分勝手な解釈を挟んでしまう。厳格な文学研究者からは批判されるかもしれないが、ある程度の自由な解釈は、韻文というジャンルの芸術作品を楽しむためには不可欠なものだと思っている。そして、同じ詩を何度か読み直しつつその時々的心境に合わせて解釈し直すというようなことも、許容されると考えている。実体験に基づいてその極端な例を挙げようとするれば、イタリア文学史上最大の叙情詩人の一人レオパルディの、ソネットAlla luna(月へ)のことが思い浮かぶ。

何年ほど前のことだったろうか、筆者は大失恋をしてそのショックから失った女性のことを朝夕考えていた時期があった。しかしある瞬間、自分の頭の中に浮かんでは消える彼女のイメージが、実はもはや現実のその人からかけ離れたものになっているのではないか、という疑念を覚えた。脳内で特定の女性が不特定の女性に変容していくこの不思議な現象に驚いた筆者は、この人についてイタリア語で語るならば“l'una”(“una”は、不特定かつ単数の「ある女性」を示すが、そこに敢えて定冠詞を加えた)と呼ばなければならぬと考えた。今考えてみると恥ずかしいことだが、この心理状態を詩にしてしまおうという試みさえ企てられ、その作品のタイトルは“All'una”となるはずだった。だが、これでは奇を衒った感が出て面白くないし、また何より「一時に」という時刻を示す表現にもなってしまうからまずいと思われた。そして、そこで思い出したのが、レオパルディの例のソネットのタイトルだったのである(そして、我が詩作の計画は頓挫した)。“luna”(月)という単語と、“l'una”という冠詞と代名詞の組み合わせとが、全く同じ音を有しているということに気づいたのであった。



【ジャコモ・レオパルディ】

もちろん、“luna”のうちに“l’una”を見出すという読み方は、単なるこじつけであってそれ以外の何ものでもない。ひょっとすると、こうしたアクロバティックな解釈をしてしまうのは、筆者がイタリア語を母語としないからこそのことかもしれない。だが、こうした「こじつけ」的解釈をするのは、どうやら外国人だけではないようである。今から5年ほど前のことだったろうか、パスクイーニという高名なダンテ学者が京都に来て講演を行ったことがあった。その時、質疑応答の際に、聴衆の側からイタリア語の韻文をどうも味わいつくすことができないと

いう発言が出た。これに応えるべく、パスクイーニは A Silvia というレオパルディの有名な詩を例に出して話し始めた。彼は、この詩の4行目と6行目とが、“ivi”という音の脚韻を踏んでいる(4行目の終わりは“fuggitivi”(移ろいやすき)であり、6行目の終わりは“salivi”(あなたは上りつつあった)である)という点について注意を喚起した。というのは、“ivi”という音のまとまりが、“andare”(行く)の古語“ire”の半過去形二人称単数の“ivi”(あなたは行ってしまいつつあった)と全く同じ響きをもつからである。A Silvia は、夭折してしまった片思いの相手への思いを語る詩である。だから、表面上はそれぞれ「移ろいやすき」「あなたは登りつつあった」と理解すべき“fuggitivi”と“salivi”の二語において、脚韻によって浮かび上がる“ivi”という音のまとまりがもう一つの意味を暗示し、それが愛する女性の夭折というテーマと繋がってくるのだというのである。

さて、同じこじつけの解釈であっても、筆者のそれが単なる思い出話であるのに対し、パスクイーニのそれはより高尚であり、また客観的かつ説得的でもあるように思われる。いずれにせよ、読者諸氏には、これらの詩に実際にあたってみて、それぞれに自分なりの解釈を楽しんでもらいたいものである。

[図版の出典]

2013.4.17 <http://it.wikipedia.org/wiki/Foscolo>

http://it.wikipedia.org/wiki/Giacomo_Leopardi 掲載画像

(元当館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

文化セミナーご案内

『ダンテ：教皇とローマ教会』

日時：5月25日(土) 17時～19時

場所：日本イタリア会館 京都本校

料金：会員500円、一般1500円

この春、ローマ教皇ベネディクトゥス16世が退位し、その後、コンクラベを経て新教皇フランチェスコ(1世)が即位したことは記憶に新しいところです。教皇が自分の意思で退位するのは非常に珍しいことで、実に719年ぶりと言われています。そして、その時の教皇退位騒動で人生を狂わされた男の一人がダンテでした。今回は世界的なダンテ研究者であるハーバード大学のリーノ・ベルティーレ教授をお迎えして、ダンテが教皇やローマ教会に対してどのような眼差しを注いでいたのか、わかりやすく解説していただきます。



【ダンテ・アリギエーリ】

2013.4.17

wikipedia 掲載画像

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>